



# 人権作文に学ぶ

8月は日本にとって、そして世界にとって、決して忘れてはならない歴史が刻まれた月です。市立学校では、戦争の悲惨さと平和の尊さ、命の大切さを学ぶためにさまざまな平和学習が行われています。今回は、入部七海さん(作文執筆当時は矢部清流学園6年生)の一遍を通して、人権と平和について考えてみましょう。

## 「私が大切にしたいこと」

私は、長崎に修学旅行に行きました。特に心に残ったのは原爆被爆者である城だいさんのお話です。城だいさんは六才の時、爆心地より二四キロメートル離れた山かげの立山町で被爆したそうです。

その後は、防空ごうで過ごし、長崎市内が真っ赤に燃え、たくさんの方が亡くなったたり苦しんだりしているのを見たそうです。

(中略)

お話を聞き、本当に苦しい気持ちになりました。原子爆弾だけでなく、原子爆弾を落とすという状況をつくった戦争は、決して許されることではないと思いました。私は、相手の気持ちを考えないで、自分の立場や都合だけを考えて、力づくで解決するのはだめだと思いました。それが大きくなったのが戦争で、相手を傷つけるだけでなく多くの人が亡くなってしまふのです。だから、戦争にしないためには、力づくで解決するのではなく、自分も相手もお互い正直に意見を言い合って、しっかりと納得するという話し合いが必要だと思いました。

(中略)

力づくで物事を解決しようとする人は、話し合いの時や普段の生活でも、周りの人を従わせる力をもって、自分の思い通りにしようとする人かもしれません。その人は、一見強い人に見えるかもしれませんが、私の考える本当に強い人は、如己堂で過ごした永井博士のような人です。永井博士は被爆しながらも、周りの多くの人々の治療に当たった医師です。「如己愛人」という「己のごとく人を愛せよ」という言葉を残しました。私も、永井博士のように周りを見て、困っている人、苦しんでいる人がいたらその人によりそい、

声をかけ、その人の力になれる人になりたいです。

多くの国が核兵器を持っていきます。それが使われないように、戦争が起きないように、私は永井博士のような強さを持ち、相手に自分の考えを押しつけるのではなく、意見を出し合って互いを理解し、納得できる話し合いをしたいと思います。(終)



【如己堂 ©NAGASAKI CITY】 写真提供：(一社)長崎県観光連盟  
如己堂(にょこどう)は、永井隆博士の病室兼書斎です。博士はこの二畳間で自身の病氣と闘いながら、人々を励まし助けました。

入部さんは、現在矢部清流学園7年生。当時を振り返りながら、今の気持ちをお話しいただきました。

▼この作文に込められた思いを聞かせてください。

「実際に被爆された人のお話を初めて聞いて、戦争は絶対にしてはだ

めだ、と強く思いました。今も世界の多くの地域で戦争が起きています。平和な世の中にするために、まず身近なところから喧嘩をしないとか、人を傷つけないようにするとか、私たちにもできることがあるんじゃないかと思って書きました」

▼平和学習で学んだことを、何か実践されていますか？

「永井隆記念館で資料を見て、自分自身も病氣や被爆で苦しいののに、他の人を助けようと力を尽くされた永井博士には勇気をもらいました。7年生になって、1、2年生と一緒に遊ぶ計画づくりをしたのですが、考えたり実行するときに周りを見て、より気にかけることができるようになりました。永井博士のような生き方をしたという思いと、物事を決める時にはしっかり話し合いたいという思いが、その時にも活かされたと思います」

▼八女市の皆さんにメッセージをお願いします。

「自分のことだけでなく周りを見て行動し、困っている人がいたら助けようとするのは、大人になっても大切なことだと思います。みんなと一緒にそんな意識が持てる八女市の皆さんであってほしいです」